2009年11月22日　主日礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙8章12～25節

説教題：からだの贖いを待ち望む

1　肉に従って生きるなら、死ぬ

パウロは、自分の肉のうちに善が住んでいなくて、心では神に従いたいと思っているけれど、でもどうしても罪の力に従ってしまう弱い自分だと告白しました。私たちも同じです。自分の弱さや罪深さを知るたびに、こんな自分なんか救われるはずはないと落ち込みます。神はそんな私たちであることをご存じで、「今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してない」と言ってくださいます。

なぜなら、この弱いからだのために、キリストが肉の姿をとられ、肉において罪を処罰してくださったから。すでに罪の処罰が終わったのですから、キリストにある者は、罪に定められることは決してない。それが前回までの要約です。

続けてパウロは12節でこう言います。「私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負っていません。」言い換えれば「借金を返すまでは、死ぬまで肉に従って生きていかなければならないなんて、そんな義務は一つもない。」このようなことを聞くと少しは安心します。しかし次のことばはどうでしょうか。13節。「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです。」

これを読んでこんなふうに受けとめたのではないか。“私は肉に従って生きている人間だ。結局死ぬしかないのだ。永遠のいのちが欲しいなら、がんばってからだの行いを殺しなさい。そんな命令なのか。でもできない。困ったどうしよう。”

2　御霊

（1）御霊はからだの行いを殺す

何度も言いますが、努力によってからだの行いを殺すことができるのなら誰も悩みません。できないからみんな困っているのです。パウロもできませんでした。では13節はどういう意味なのか。「肉に従って歩むな。」そんな命令ではありません。13節の最初に「もし」とあります。「もし仮にこうこうであったら、こうなりますという仮定の話をしている。12節ですでに、肉に従って歩む責任を、肉に対して負っていないと言っていたのですから、パウロに言わせれば、私たちはもうすでに肉に従って生きていない存在なのです。

「キリスト者は肉に従って生きていない。」そう言われても、実感が湧きません。どう見ても自分は肉に従っている。あれが欲しい。これが食べたい、あの服を着てみたい。神のことを思い巡らすことよりも、自分を満足させることについていつも考えています。確かに私たちの目にはそのような現実しか見えません。ところが神の目には、肉に従う私たちではなく、御霊に従う私たちのことが見えているらしいのです。

なぜそのようなことになるのか。ここで御霊が大切な働きをして下さいます。この箇所では二つのことが書かれています。

先ほど私たちは自分の力でからだの行いを殺すことなど絶対にできないと言いまし

た。では誰が殺してくれるのか。13 節に「御霊によってからだの行いを殺す」とあります。私たちにはできなくなっていることを、代わりに御霊がしてくださる。そのことを日々繰り返しして下さっているので、私たちはやがて永遠のいのちに生きることになる。この「生きる」は未来形で書かれていますのでそのような意味になります。

（2）御霊は私たちを神の子とする

御霊の働きの二つめは、15 節以降に何度か繰り返されています。「あなたがたは、(中略)子としてくださる御霊を受けたのです。」「私たちが神の子どもであることは、御霊御自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。」

私たちは神に対して罪を犯し、逆らうことばかりをしてきました。人間の子どもではありますが、神の子どもという身分などまったくありえないことでした。ところが私たちのうちに住んでくださっている御霊は、まず神に対してこう言ってくださる。「父なる神よ。この者はあなたの子どもです。確かに今は罪が宿る肉をまとい、罪に汚れてはいますが、しかしこの者は自分の罪に悲しんでいます。ですからこの者の罪を赦し、あなたの子としてください。」

そして続いて御霊は私たちにこう語りかけ続けます。「あなたは今はまだ滅びていく罪の肉をまとっていて、そのことで苦しんでいるけれど、大丈夫。わたしが父なる神にあなたのことを、この者は神の子ですと証言していますから、安心しなさい。神の子であるならば、滅びることなど絶対にありえませんから。」

（3）疑問

今御霊の働きについて二つのことを申し上げました。一つは、御霊は私たちのからだの行いを殺してくれる。二つめは、御霊は私たちを神の子としてあかししてくださる。

しかしどうですか。どうしても疑問が残ります。御霊が私たちのからだの行いを殺してくださる、と言われてもそれがわからない。だって、もし本当に殺してくださるのなら、私たちは肉の弱さに苦しむはずはないじゃないか。もし御霊が全部からだの行いを殺してくれているというのなら、あれが欲しい、これも欲しいとむさぼることはなくなるはずだ。でも現実はどうか。全然無くならない。いや以前よりも激しくなっているかもしれない。聖書で言っていることがどうしても納得できません。

（4）キリストと苦難をともにする

混乱の原因が一つあります。13 節で「からだの行いを殺す」と聞くと、「完全にからだの行いを消してくれる」とか、「私たちが苦しむことがない状態にしてくれる」ことを思い描くからです。では本当はどういう意味か。

その疑問を解く鍵は、17 節以降に出てきます。「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。」

前半は嬉しいことが書いています。もし子どもであるなら相続人である。天の御国という大きな滅びることのない豊かな財産を相続することが決まっています。今はまだいただいていませんが、やがて相続することにな

ります。これはすばらしい。

しかし、後半に書かれていることはどうか。「キリストと栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人である。」私たちは苦しむことはないとは書かれていません。キリストと一緒に苦しんでいるのが私たちですと書いています。いったい何を苦しんでいるのですか。

それを知るためには、イエス・キリストがどのような苦しみを経験されたのか。そこに戻る必要があります。パウロは言っています。3 節後半。「神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」

私たちはイエス・キリストが十字架にかかられ、苦しまれ、死んでくださったことは知っています。そこにどんな意味があったのでしょう。

キリストのからだに釘が打たれ、手と足を刺し通しました。その釘に全体重がかかってきます。十字架の周りには、イエスをののしる声とあざけりの笑い声が満ちています。弟子たちも逃げてしまいました。神である方が肉の姿をとられて、そのような苦しみを味わわれました。神である方が、私たちがまとっているこの肉がどれほどに弱いものであるのかを、十字架において知ってくださいました。

17 節には「私たちがキリストと苦難をともにするなら」とあります。私たちがまず最初に、努力してキリストの十字架の苦しみを味わうなら、これこれのご褒美がいただけますよ、そんなふうに読みがちです。ところがよく考えてみますとそうではない。すでにイエス・キリストは、私たちが苦しむ苦しみを味わっておられた。そして事実、私たちはこの弱いからだのことで苦しんでいる真っ最中です。努力してキリストの苦しみを味わいましょう、キリストに近づきましょう、ではない。もうすでに私たちは、キリストの十字架の苦しみの近くにいたということです。キリストのほうから近づいてくださっていたということです。

私たちは自分のからだが罪の汚れを見てこんな私は十字架に近づくことなどできないと考えます。ところが、目を上げてみますと、十字架は私たちのすぐそばに立っているのです。父なる神が、イエス・キリストが、御霊が、私たちのほうに寄り添っていてくれた。

そうしますと、17 節のみことば。私たちが最初に考えたのとは全く正反対のことを言っている。もし、私たちが自分の肉の弱さで苦しんでいるなら、それこそキリストと苦難をともにしていることだということです。多くの人はからだの弱さに苦しんでいます。ということは、あなたがたは、神の相続人であり、キリストとともの共同相続人ということになる。

先ほど、「御霊が私たちのからだの行いを殺す」とあって、そこがわかりにくいと言いました。キリストが私たちの代表となられ、私たちのからだの行いを殺してくださったということです。それが十字架が示している恵みの意味です。

「御霊によって殺すなら」とありますが、それはちょうどこんなことではないかと想像します。御霊は、私たちが抱えているからだの行いを十字架に運ぶのです。そうやって十字架で私たちのからだの行いを殺してくれる。そんなことではないかと私は考えます。

4　待ち望む私たち

（1）うめきながら

パウロは18節以降で、被造物全体も私たちが救われて神の子とされていくことを待ち望んで、ともにうめいていると言います。被造物もうめいています。地球環境が今問題になっていることはだれでも知っています。なぜそうなったのか。被造物の側に問題があったのではない。私たちのむさぼりの罪が原因です。人間の罪が環境を破壊している。信仰がない人であっても恐らくそのことは認めるのではないですか。聖書には、この環境問題を解決するためには、まず人間が救われなければならないとはっきりと書いています。考えてみれば実に当たり前の話です。

うめいているのは被造物ばかりではない。私たちもうめいています。人間関係にうめきます。病気のことでうめきます。自分だけではない。愛する人のことでうめきます。自分の罪にうめきます。高齢の方は、このあいだまでできたことが、今日できなくなる。そういう自分に向き合わざるを得なくなる。だれだってうめくしかありません。そうやって死んでいくしかないと悲しみます。

日本の文化には短歌や俳句というものがあって、心のうめきを短いことばで書き残してきました。桜の花びらが散るように、私たちの命もはかないものだ。そんな心理が日本人の深いところに根付いています。うめいても解決はないという発想です。

しかし、私たちは違います。確かに今はうめいているけれども、次のように言うことができる。23節。「御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。私たちはこの望みによって救われているのです。」

（2）確かなことを待ち望む

私たちはこれから先のことを待ち望むことができる。しかしそれは「まだ見ていないもの」とあります。誰もまだ見たことがないことだかれど、それを待ち望みなさいと言われています。普通の人なら、「ばかげたことだ」と思います。目に見える証拠がないからです。では、私たちはばかげたことを待ち望んでいる愚か者なのでしょうか。

皆さんは、明日のことを考えていらっしゃるはずです。というのは、明日という日が確実にやってくると信じて疑わないからです。こんなことを言うと、何を今更と笑うでしょう。信じるなんて言う前に、明日が来るのは当たり前だと思っているからです。でもよく考えてください。明日という日を誰も見たことがありません。けれども明日また日が昇ることを誰も疑いません。どうしてでしょう。地球が24時間かけて一回転しているのだからといろいろ理屈はいうかもしれない。この世界は理屈どおりに動いているのだから、私たちは安心して明日が来ることを待ち望むことができる。そういうことです。

ではこのような世界を創造されたのは、誰ですか。私たちが信じている聖書の神です。どんなふうに造られたか。自然界を見れば一目瞭然です。すべては法則に則って秩序に従って動いています。例外は一つもありません。

ですから、聖書に「見ていないものを忍耐をもって望みなさい」と書かれていても、そこにはきちんと秩序があると言っているのです。神が忠実に毎日太陽を東から昇らせる

ているのなら、それと全く同じように、私たちの救いの約束の忠実に守られていく。だから、見てはいないけれど、熱心に待ち望むことできるのです。

確かに私たちは今苦しみの中にいます。けれども、それは意味のない苦しみではありません。キリストと、栄光を受けるために苦難をともにしている。そんな大切な意味があったのだと言われます。もし私たちが苦しみの中にあるなら、私たちは神の相続人として資格をはっきりといただいているのですと、今朝言われています。

キリストが、十字架によって、私たちの苦しみを恵みに変えてくださいました。御霊が、私たちを励ましてくださっています。